



Title	形容詞を基体とする複合語についての一考察
Author(s)	由本, 陽子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 89-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72712
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

形容詞を基体とする複合語についての一考察*

由本 陽子

1. はじめに

語形成論において、一般に複合語は構成要素間の関係によって以下のように分類されている。

- (1) (a) subordinate (e.g. windmill, bookseller, pickpocket)
- (b) attributive (e.g. greenhouse, swordfish, Sunday driver)
- (c) coordinate (e.g. blue-green, bitter-sweet, mother-child)

(cf. Scalise and Bisetto (2009), Lieber (2009), a.o.)

(a)は二つの要素のどちらかがもう一方の項(argument)である関係が認められるもの、(b)は修飾関係にあるもの、(c)は‘dvandva’とも呼ばれる構成要素が対等の関係にあるものとされている。この分類は、構成要素間の意味関係や複合語の意味解釈によってさらに下位分類されるが、これについては研究者によって多少異なった見解が見られる。英語の語形成論においては N-N compound が一般に ‘synthetic compound’ (または‘secondary compound’) と ‘root compound’ (または‘primary compound’) と呼ばれる 2 種類に区別されるのだが、後者を(1)の 3 分類のどれに属するものとするかについて、同じ論文集(*The Oxford handbook of compounding*)に収められている Scalise and Bisetto (2009)と Lieber (2009)の間でさえ微妙に異なった見解が見られる。前者ではこれをすべて(b)の一種に分類しているが、後者では、(a)に属するものは tea merchant や table leg のように左側要素があくまでも右側要素の項と見なせるものであって、Sunday driver のようにたとえ右側要素が動詞からの派生語であっても付加詞の関係にある場合は(b)に分類されるとしている。いずれにせよ、この場合分類のカギとなっているのは動詞や名詞の項関係である。

また、(a)タイプの分析において焦点は常に動詞の項構造が関係する複合であった。このことは、上記の Scalise and Bisetto では、(a)の下位に属する secondary compound を ‘verbal-nexus compound’ と呼び、また、多くの形態論の入門書や Handbook において ‘synthetic compound’ を主要部が動詞からの派生語である ‘verbal compound’ と同義であるよ

*本稿は平成 30 年度科学研究費補助金基盤(B) (17H02334 研究代表者：由本陽子) の援助を受けて行った研究成果の一部である。なお、データ収集については、本学言語文化研究科に在学中の板垣浩正さんと李国昕さんにお世話になった。特に板垣さんには BNC による予備調査の段階から、膨大なデータから複合語を抽出するという、根気が必要な作業を長期にわたってお願いし、尽力いただいた。お二人に深く感謝の意を表したい。

うに扱われていることから窺える (Fabb (1998), Booij (2005), etc.)。英語の verbal compound についての研究は、先述のように主要部が動詞からの派生語のもの、中でも生産性が高い[X + V-ing], [X + V-er], [X + V-en]が主な対象とされ、その形成に関わる制約や解釈規則についての分析もこれらの型の複合語を中心に、動詞の項構造や概念構造(LCS)を用いて行われてきた。複合形容詞についての研究は、動詞からの派生形容詞である V-en (e.g. hand-made, thin-sliced), V-ing (e.g. eye-catching, good-looking) , V-able (e.g. machine washable, teacher trainable)を含むものは考察対象となっても、本稿が考察の対象とする形容詞または形容詞からの派生語を右側要素とする複合語が(a)(b)どちらに分類され、どのような条件のもと形成されるかという議論は、管見の限りほとんどなされてこなかったのである。

しかし、動詞からの派生語でなくても、以下に示すように、英語では語根形容詞が補部を義務的にとるものがある程度の数存在し、特に修飾要素として名詞の前の位置に生起する場合には、そのような形容詞を主要部とする複合語も頻繁に用いられており、形容詞とその内項の複合は英語においてある程度生産的な語形成であるように思われる。

(2) a. free of tax → tax free

b. specific to a certain language → language-specific

c. worthy of trust → trustworthy

ただし、少し気になるのが、辞書におけるこれらの扱いである。(2a,b) にあげた-free, -specific や他にも -worthy, -looking, -proof, -prone, -richなどは、接尾辞と同じようにハイフンつきで項目に挙げられており、conscious, resistantなどは、その意味用法の項目に[複合語として]と特定され、複合語を形成するものは特別に扱われている。事実、3 節でも述べるように、すべての内項をとる形容詞が複合語を形成するということはなく、いっぽうで、特定の形容詞においては内項との複合は非常に生産性が高いのである。本稿で考えたい第一の問題は、果たして心内辞書においてもこれらの特定の形容詞について、複合語を形成するものとして個々に語彙項目に挙げられる形で記憶されているのか、それとも、根底には、verbal compoundと同じように、原理や一般化できる制約に基づいた規則があるのか、ということである。

また、形容詞を基体とする複合形容詞を、verbal compoundと対応づけて考えるなら、以下のような形容詞からの派生名詞を主要部とする複合語についても、synthetic compoundとしての分析が適用される可能性について明らかにせねばならない。

(3) a. conscious of class → class-conscious → class-consciousness

b. dependent on drug → drug-dependent → drug dependence

c. sensitive to gender → gender-sensitive → gender-sensitivity

これらの複合名詞が、verbal compound と同様に、もとになっている形容詞の項構造が名詞に受け継がれる形で、複合語形成の制約に働いていると考えられるのかというのが第二の問題である。

本稿では、まず 2 節で英語の verbal compound の形成に関わる制約として先行研究で主張されている原則を概観する。3 節では先述の二つの問題に迫るべく行った *Corpus of Contemporary American English* (COCA) を用いた調査の結果を示し、4 節でこのデータについて考察する。5 節はまとめである。

2. Verbal Compound の形成に関わる制約 : First Order Projection Principle

動詞からの派生語を主要部とする総合的複合語の形成について、Selkirk (1982) は、文レベルでの θ 理論を複合語内も含めた語のレベルにも拡大して解釈できるように、First Order Projection Principle (以下では「第一投射の条件」) を提案した。これは、主語以外の項が動詞の第一投射内、すなわち姉妹の関係において満たされねばならないことを述べたものである。この制約と語構造の二股構造制約とによって、(4)に示すような 2 つの内項を義務的にとる動詞を基体とする複合語形成においては、(5)に示すような制限があることが説明された。

- (4) a. hand a toy to the baby, put boots on the shelf $\langle \underline{x}, y, z \rangle$
 b. *hand a toy, *hand to the baby, *put boots, *put on the shelf
 (5) a. *toy handing to babies, *boot putting on the table
 b. *baby toy handing, *table vase putting
 c. the handing of toys to babies, the putting of boots on the table
 d. *girl handing, *child drinking, *teacher scolding

この条件は、付加詞と結合した複合語は、動詞が自動詞で補部をとらない場合にのみ、容認されることも説明するものである。

- (6) a. 様態 : rapid walking, barefoot running, slow walker
 (cf. *barefoot handing of the baton)
 b. 場所 : indoor running, hammock napping, home worker
 (cf. *party devouring of pasta)
 c. 道具 : snorkel diving, crutch walking, wheelchair runner
 (cf. *knife cutting of cheese)

また、この条件が「主語以外の項」というように文法的機能によって適用外の要素を規定しているのは、英語の特に生産性が高い [x+V-ing] 型の複合名詞においては、非能格のみ

ならず非対格自動詞でも、主語との複合が許されないという事実に基づいている。

- (7) a. *girl swimming, *child crying, *clerk working
 b. *rain falling, *population growing, *teeth decaying

これに対して、Kageyama (1985)は、英語のゼロ派生名詞を主要部とする場合や (e.g. rainfall, earthquake, landslide)、日本語における「X+動詞連用形」型の複合名詞においては、非対格自動詞であれば、主語との複合が可能である (e.g. 「崖崩れ」) ことを指摘し、「第一投射の条件」の適用を「外項以外の項」として修正すべきであることを主張した。

Selkirk(1982)が提案した条件は、上記のような点では不備があったものの、あくまでも、もとの動詞の項構造に基づく条件を示していたそれ以前の提案 (e.g. Roeper & Siegel (1978) a.o.) ではうまく説明ができなかった、主要部が形容詞である複合語についての事実をも説明できるものであった点で優れていた。それは、第一投射の条件では、もとの動詞から項を受け継いだ派生語が主要部と見なされているからである。すなわち、たとえば主要部が [V+able]_A 型の形容詞の場合は、もとの動詞の項構造が(8)に示すように変更されているため¹、(9)(10)に示すように、名詞として用いられる動詞由来複合語とは異なる項の現れ方が見られるのである。

- | | | | | |
|------|-----|--|----------|------|
| SUBJ | OBJ | | BY OBJ/φ | SUBJ |
| | | | | |
- (8) train: (Agent, Theme) → trainable: (Agent, Theme)

- (9) a. The teachers trained the children.
 → b. *teacher-training of the children
 → c. teacher-trainable children (教師によって訓練され得る子供)
- (10) a. He ascribes cancer to smoking. (cf. *ascribe cancer, *ascribe to smoking)
 → b. *smoking-ascribing of the doctor, *cancer-ascribing of the doctor
 → c. smoking-ascribed disease (喫煙を原因とされる病)

派生形容詞においては、もとの動詞の直接内項であったものが修飾対象となるため、もとの動詞がさらに他の項を義務的にとるような場合、(10c)に示すように、その項と結合する形で複合語が形成される。いっぽう、義務的にとる内項が一つの動詞が基体の場合は、(11)に示すように、二次述語も含め様々な付加詞と結合した複合語が容認される。これらと(6)に示した複合名詞についての事実との差異も、Selkirk の分析では問題なく説明できる。

¹ 主要部が分詞形容詞[V+en]の場合も(8)と同じ変更が生じる。なお、Selkirk (1982)は LFG による分析を提案しているため、このような表記となっているが、形容詞への派生によってもとの動詞の外項が抑制され、内項が外項化されるという考え方は生成文法による分析と軌を一にする (cf. Selkirk (1982: 39-42))。

- (11) a. 道具 : pan-fried (fish), hand-woven (carpet)
 b. 場所 : home-made (jam) , factory-assembled (product)
 c. 様態 : slow-cooked (stew), tightly-woven (fabric)
 d. 結果述語 : thin-sliced (ham), rough-curved (surface)
 e. 描写述語 : fresh-frozen (fish), fresh-roasted (coffee)

主要部が語根である複合形容詞について、Selkirk はこの条件が適用されるのかどうか明確にはしていないが、彼女が派生語も単一語も同じレベルの範疇として扱うことを主張していることから考えれば、当然本稿の考察対象である複合形容詞にも同じ第一投射の条件が適用されるはずである。また、形容詞を基体とする派生名詞を主要部とする複合語についても同様にこの条件が適用されると仮定せねばならないであろう。管見の限り、この仮説が事実と合致しているかどうかについて調査した先行研究はない。そこで、今回限られた範囲ではあるが、COCA を用いた調査を行ってみた。次節では、その結果を報告する。

3. COCA による調査結果

今回、まず *British National Corpus* (BNC)を用いた予備調査を行い、ある程度生産性が認められると思われた形容詞の中で、異なるタイプの PP を補部として選択するものを選び、それらを主要部とする複合形容詞を COCA から収集した。次に、それらの派生名詞を主要部とする複合名詞を収集し、もとの形容詞の補部と考えられるものとそうではないものとに分類した。調査対象としたのは、conscious, dependent, familiar, free, immune, relevant, rich, sensitive であったが、1 節で述べたように、free と rich については、膨大な数があり、また、辞書にハイフンつきで項目に挙げられているので、本稿の考察の対象外とした。以下にそれぞれの総数、補部(Comp) との複合語、付加詞または主語に対応するもの(Mod-/Sub-)との複合のトークン数を表にし、具体例としては、それぞれ上位 10 位²のタイプを挙げている。

まず、conscious/consciousness については表 1 に示すように、派生名詞を主要部とするものが形容詞を主要部とするものの 2 倍以上の数があった。前者については、補部との複合が 7 割程度を占めているが、(12c)に示すように、補部以外のものとの複合も 3 割程度あった。たとえば、victim-consciousness は「被害者意識」と訳されるように、「被害者を意識している」のではなく、「自身が被害者である意識を有する」ことを意味するので、補部との複合ではない。もっともトークン数が多かった group-consciousness も「集団意識」、すなわち「集団に共属しているという自覚的な意識」を意味するので、補部との複合とは見なせない。もとの形容詞を主要部とする group-conscious については 1 件しか例が見つからなかったことから、このように考えるのが良いと思われる。また、AI-consciousness のように、所有者を表す、すなわち、もとの形容詞にとっては主語にあたるものとの複合と見なせる

² 生起回数が多くてもすべてが同一の文献に用いられている場合もあったので、このような例は上位ランクから外した。

複合名詞は頻繁に用いられているが、これも複合形容詞としては 1 件も見つかっていない。
興味深いことに、このタイプの複合名詞には、(13)に示す例のように、基体形容詞の補部に
相当する要素を後続の PP で表しているものがある。

表 1

	conscious (A)	consciousness (N)
X-	279	641
Complement-	279	450
Modifier/Subject-	0	191

(12) a. X-conscious

health (68), security (21), self (19), safety (15), fashion (14), price (10), body (9),
image (9), people (9), calorie (7)...

b. X-consciousness (Comp)

class (100), stigma (41), health (18), body (15), gender (13), color (13),
fashion (13), self (12), word (12), perspective (10)...

c. X-consciousness (Mod/Subj)

group (101), community (12), creature (10), animal (7), consumer (7), AI (7),
machine (5), world (5), victim (4), U.S.(3)...

(13) a. world-consciousness of the indigenous Aboriginal population (2009 AmerIndianQ)

b. U.S.-consciousness about the math gap (1993 Time)

複合形容詞と複合名詞との間にこれよりさらに大きく生産性の違いが見られるのは、
dependent/ dependence と sensitive/ sensitivity である。以下の表 2 表 3 を見られたい。

表 2

	dependent (A)	dependence (N)
X-	152	749
Complement-	152	679
Modifier-/Subject-	0	70

(14) a. X-dependent

alcohol (16), drug (10), dose (8), field (8), insulin (8), time (7), water (5), glucose (4),
oil (4), content (3)...

b. X-dependence (Comp)

alcohol (160), drug (95), oil (39), filed (37), task (36), nicotine (33), substance (22),

path (21), density (20), forest (20)...

c. X-dependence (Mod/Subj)

energy (39), trade (11), world (4), security (3), export(3), import (3), agency (2),
customer (1), habitat (1) teacher (1)...

(15) a. security-dependence on the United States (1999 Foreign Affairs)

b. world-dependence on fossil fuels (1997 Environmental)

表 3

	sensitive (A)	sensitivity (N)
X-	236	878
Complement-	236	765
Modifier-/Subject-	0	113

(16) a. X-sensitive

time (18), pressure (16), temperature (14), price (12), case (8), rate (8), action (7),
context (7), heat (7), gender (6)...

b. X-sensitivity (Comp)

insulin (109), contrast (51), gluten (27), disgust (26), food (22), hearing, (21),
climate (16), sun (16), gender (14) , noise (12)...

c. X-sensitivity (Mod/Subj)

teacher (14), skin (13), tooth (13), issuer (8), sensor (3), detector (3) ,
government (3), nerve (2), smoker (2), breast (2)...

(17) a. he confuses adult sensitivity with childhood sensitivity (1991 CS Monitor)

b. body sensitivity to pain and fatigue (2000 Anthropol. IQ)

dependent/dependence については、alcohol と drug との複合がいずれも上位 2 語となっていて、特に複合名詞においては格段に高い頻度で用いられているが、いずれも複合形容詞としてはさほど頻繁に使用されてはいないことがわかる。また「～に頼っている」という意味で用いられる組み合わせにはあまり生産性が見られず(すなわち、X が特定されるもの)、多くの場合 ‘dependent variable’ (「従属変数」)を表すもの、すなわち、X が変数を表す複合語として形成されていることもわかった。複合形容詞の場合、X がこのいずれでもないという例は見当たらなかった。複合名詞は X が補部であるものがほとんどであったが、(15)に示すように、depend の補部以外のものとの複合語で補部に対応する PP は複合名詞の後に具現されている例も見つかった。これらには、(15b)のように X が depend の主語を表す場合と、(15a) (「防衛面で (合衆国に) 依存していること」) のように、付加詞に対応するものの場合がある。

sensitive については、BNC での予備調査において派生名詞のうち、sensitivity が複合語を形成している例は皆無であったので、sensitivity を主要部とするものを調査対象とした。これらについても、conscious や dependent と同様に、複合形容詞を形成するのは補部との複合に限られていたが、複合名詞においては、13%ほどそれ以外のものと複合している例が見つかった。このうち(17b)のように sensitive の主語にあたるものがほとんどを占めるが、(17a)のように、修飾要素としてしか解釈できないものもあった。

残りの immune, relevant が複合形容詞を形成していると認められるものは非常に少なかった。後者については、数個の非主要部に限られており、収集できたのは policy-relevant (13), task-relevant (7), job-relevant (4), mood-relevant (2), age-relevant (1)のみである。前者については、host immune system (「宿主免疫システム」) という術語が頻繁に用いられているが (28)、これは、host's immune system と表現されることもあり、複合形容詞の例からは外すべきものと考えられる。他に mouse immune system, insect immune system など収集されたが同類と見なせる。疑いなく複合形容詞と考えられるものは、vaccine immune(5), violence immune(4)の2タイプだけであった。それ以外の場合ではすべて、名詞に後続し、補部が to 前置詞句によって表されていた。したがって、immune, relevant は義務項をとる場合でも生産的に複合形容詞を作るとは考えられない。

いっぽう、派生名詞 immunity を主要部とする複合名詞は多数収集できた。relevance については、それほど多くの複合語は収集できなかったが、ある程度タイプ数があった(15)ので、これらの形容詞由来複合名詞には生産性があると言えるだろう。その内訳は表4に示すとおりである。

表 4

	immunity (N)	relevance (N)
X-	358	58
Complement-	204	58
Modifier-/Subject-	154	

4. 考察

3 節では、[名詞＋形容詞]型複合形容詞と[名詞＋派生形容詞]型複合名詞が実際にどれほど用いられているのか、COCA を用いてデータを収集した結果を示した。今回は限られた範囲の調査ではあったが、この2種類の複合語について2節で見た「第一投射の条件」が成立していると言えるかどうかについては、ある程度の判断材料が提供されたと考える。

まず、前者の型の複合形容詞は限定された形容詞においてのみ生産性が認められ、しかも、それらは、非常に頻繁に使用されていることが明らかになった。また、義務的項をとる場合、その項の複合のみが許されることから、これらの限定された形容詞を主要部とする複合形容詞においては第一投射の条件が成立していることが確認できた。ただし、義務

項をとる形容詞でも、その項との複合が容認されていないと考えられる場合もあるため、形容詞全般においてこの条件に従った複合語形成規則が存在するとは言い難い。心内辞書においても、特定の形容詞が複合語主要部として登録されている可能性は否めない。

後者の型の複合名詞については、これらを *verbal compound* と同列に扱うことには問題があることを示唆する結果が得られた。複合形容詞の生産性が高いものについては、補部との複合による複合名詞が圧倒的に多数ではあるが、*consciousness, sensitivity* が主要部の場合には、主語または付加詞との複合語も全体の 10%以上収集された。主要部が名詞化すると形態的には1節で見た[N+N]型の *root compound* と区別がつかない。仮に *root compound* であれば、原則としてどのような要素でも複合することができるので、これらは第一投射の条件の適用外であると考えられることもできるだろう。しかし、注目すべきは、(13)(15)(17)（以下に再掲）の例が示すように、主語または付加詞と複合した場合、もとの形容詞が義務的にとる項にあたる名詞が、前置詞句として複合名詞に後続して表され得ることである。

(18) a. world-consciousness of the indigenous Aboriginal population (= (13a))

b. security-dependence on the United States (= (15a))

c. body sensitivity to pain and fatigue (= (17b))

(18)の例では複合している要素が義務項ではないことから、仮に第一投射の条件に従うなら、複合名詞は *synthetic compound* とは解釈できず、*root compound* と見なさねばならない。しかしながら、下線部はもとの形容詞が選択する前置詞句である。したがって、主要部の派生名詞は形容詞から項構造を受け継いでいると考えるのが自然である。項構造を受け継いでいる派生名詞が複合語内ではなく、語外でその項を具現しているという状況は、明らかに第一投射の条件の違反となる。このようなパラドックスは、第一投射の条件が、これまで動詞が基体であるものを中心に検証されてきたために、*synthetic compound* 全般に適用できる原理とは言えないものであることを示唆している。

5. まとめ

以上、形容詞および形容詞からの派生名詞を主要部とする複合形容詞と複合名詞において、もとの形容詞とどのような関係にある要素が複合するのか、また、もとの形容詞が選択する項がどのように具現されるか、を明らかにするために行った COCA を用いた調査結果について報告した。[X+形容詞] 型複合形容詞は、限られた形容詞においては高い生産性が認められ、それらにおいて結合しているのは形容詞の義務項であることが明らかになった。したがって、この型の複合形容詞については、部分的に第一投射の条件が有効であると言える。[X+形容詞からの派生名詞] 型複合名詞についても、もとの形容詞が選択する義務項と複合する場合が圧倒的に多いとはいえ、X が形容詞の主語または付加詞にあたるものである例も相当数見つかった。さらに問題となるのが、後者のタイプの複合名詞において、

形容詞の義務項が複合語の外に具現されている例が散見されることである。この事実から、形容詞からの派生名詞を主要部とする複合において、第一投射の条件が成立しているかどうか検討する必要があることが明らかになった。

実は、第一投射の条件については、近年 Lieber (2016)でも、主要部が動詞からの派生名詞である複合語について COCA を用いた調査により、その妥当性が否定されている。この調査に関しては、第一投射の条件に反する例がどれほど見つまっているのか数値が明確にされていないので、この調査結果から、果たして、[X+動詞からの派生名詞] 型複合名詞についても第一投射の条件が有効ではないと結論づけてよいかどうか判断が難しいが、長らく信じられてきた先行研究による仮説に対して再検討する必要性を示したことは評価できる。いずれにせよ、*synthetic compound* 形成の条件については、動詞以外の基体からの派生語、また、名詞以外の範疇の複合語も視野に入れた再検討が必要な時期に来ていると考える。

主な参考文献

- Booij, Geert (2005) *The grammar of words*. New York: Oxford University Press.
- Fabb, Nigel (1998) Compounding. In: Spencer, Andrew and Arnold M. Zwicky (eds.) *The handbook of morphology*, 66-83. Oxford: Blackwell,
- 伊藤たかね・杉岡洋子 (2002) 『語の仕組みと語形成』 東京：研究社.
- Kageyama, Taro (1985) Configurationality and the interpretation of verbal compounds. *English Linguistics* 2: 1-20.
- Lieber, Rochelle (2009) A Lexical semantic approach to compounding. In: Lieber, Rochelle and Pavol Štekauer (eds.) *The Oxford handbook of compounding*, 78-104. New York: Oxford University Press,
- Lieber, Rochelle (2016) *English nouns: the ecology of nominalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roper, Thomas and Muffy Siegel (1978) A lexical transformation for verbal compounds. *Linguistic Inquiry* 9: 199-260.
- Scalise, Sergio and Antonietta Bisetto (2009) The classification of compounds. In: Lieber, Rochelle and Pavol Štekauer (eds.), *The Oxford handbook of compounding*, 34-53. New York: Oxford University Press,
- Selkirk, Elisabeth O. (1982) *The syntax of words*. Cambridge, Mass.: The MIT Press.